様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：２３９０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１５２００２１

研究課題名（和文）自然の現象学

研究課題名（英文）Phenomenology of the Nature

研究代表者
中　敬夫（NAKA, Yukio）

愛知県立芸術大学・美術学部・教授

研究者番号：８０２５４２６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：「自然の現象学」は、「自ずから然り」という意味での「自然」を主題化する一連の現象学的諸研究で、全体は六部――第一部「感性論」（空間および時間）、第二部「論理」（「多なき一」もしくは「一における一」）、第三部「実在と表象」（自然と文化）、第四部「自由と非自由」（行為と無為）、第五部「身体論」（身体の発生論的構成）、第六部「他者論」（自然における他者と文化的他者）――から成る。
　2009年度から2013年度にかけてわれわれが行なったのは、そのうちの第四部の後半と、第五部の前半とであり、成果は一冊の著書と10本の論文によって公開された。

研究成果の概要（英文）：<<The phenomenology of the Nature>> is a series of phenomenological studies on the <<Nature>> in the sense of <<that which is and appears of itself>>, and they are composed of these six parts : 1) Aesthetics (space and time), 2) Logic (<<One without Many>> or <<One in the One>>), 3) Reality and representation (Nature and Culture), 4) Liberty and non-liberty (action and non-action), 5) Proper body (genetic constitution of the proper body) and 6) Others (others in the Nature and in the Culture).
　What we carried out between 2009 and 2013 was the second half of the fourth part and the first half of the fifth part of <<The phenomenology of the Nature>>, and we published a book and ten theses on this subject.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学　現象学

１．研究開始当初の背景

(1)　「自然の現象学」は、「自ずから然り」という意味での「自然」をテーマとした現象学的諸研究である。われわれの考えでは、「自然」を主題とする哲学には、実在論的傾向や思弁的・形而上学的傾向を持つものが多く、意識の経験という今日的・現象学的な観点からなされた研究は、あまり多くはなかった。

(2)　確かに現代現象学においても、メルロ＝ポンティやハイデッガーのように、「自然」（もしくは「大地」）を主題化しようとする試みは、皆無ではなかった。しかしわれわれには、後期メルロ＝ポンティの「自然の有論」や、前期・中期・後期のハイデッガーの「自然」「大地」等々の扱いは、真に「自ずから然り」「自ずから立ち現われる」という意味での「自然」を開示することには、成功していないように思われた。何かが「自ずから現れる」ためには、「現れるもの」とは区別されるような「現れさせるもの」が、存していてはならない。「現れるもの」と「現れさせるもの」が同一である場合にのみ、「自ずから現れる」ということが成り立つ。しかしメルロ＝ポンティやハイデッガーの現象学や有論からは、結局のところ、そのような「自然」は、見出されないままであった。

(3)　ミシェル・アンリの「コスモス」は、「内在」のうちに「自然」を取り込もうとする現象学的な試みの一つである。しかしアンリはそれを、あまりに主観化し過ぎてしまったのではないだろうか。むしろ必要なのは、自我と非我が分れる以前の「自然」という「現象」についての、諸研究なのではなかったか。

(4)　われわれはさらに、「自ずから然り」という意味での「自然」のうちに、「自ずからなる生き方」も、つまりは「無為」なる生き方も、求めたいと思うようになった。そのような現象学的研究は、もちろん国内外のいかなる所でも、行なわれてはいない。われわれが目ざしているのは、一言で言うならば、「無為自然」についての現象学的諸研究なのである。

２．研究の目的

(1)　われわれは、六部から成る予定のわれわれの「自然の現象学」の全体構想――第一部「感性論」（空間および時間）、第二部「論理」（「多なき一」もしくは「一における一」）、第三部「実在と表象」（自然と文化）、第四部「自由と非自由」（行為と無為）、第五部「身体論」（身体の発生論的構成）、第六部「他者論」（自然における他者と文化的他者）――のうち、すでに第三部までは完成し、二冊の著作として公刊済みであった。またその第四部に関しても、全七章から成るその全体構想のうち、第四章まではすでに脱稿済みであった。2009 年から 2013 年の 5 年間のうち、第四部に関して遂行したいと思っていたのは、シェリング、アンリ、後期ハイデッガー、マリオンにおける「自由」と「非自由」、もしくは「行為」と「無為」の諸関係について、洗い直すことであった。そして全体としてこの第四部が主張しようとしていたのは、どのような意味で「自由」や「行為」を解そうとも、その根拠・根底には必ず、「非自由」や「無為」があるということであった。

(2)　この 5 年間のうちの残りの期間において遂行したいと思っていたのは、上記の「自然の現象学」の全体構想のうち、その第五部「身体論」のなかから、幾つかの章を脱稿することであった。具体的にはそれは、デカルト、マルブランシュ、メーヌ・ド・ビラン、メルロ＝ポンティ、アンリの「身体」論もしくは「肉」論を扱う。この第五部が全体として主張しようとしていたのは、伝統的な心身論は、幾つかの誤った諸前提のもとに論じられてきたということ、そしてその問題点の幾つかを解決するためには、「主観的身体」という考えをまず認めたうえで、「身体」もしくは「肉」に関して、「発生論」的な解釈を施してゆかねばならないであろうということであった。

３．研究の方法

(1)　われわれはすでに以前に、前期ハイデッガーにおける「自由」については検討済みで、論攷も脱稿していた。そこで 2009 年度には、まず中期ハイデッガーにおける「自由」という、いささか扱いにくいテーマを、中期ハイデッガーのシェリング解釈に絡めて主題化し、併せて中期シェリングにおける「自由」や「無為」についても、考察を深めようとした。続いてそこから発展して、われわれは中期・後期のシェリングにおける「無為」や「非自由」を、今度は後期ミシェル・アンリの現象学との対比のうちに捉えようと試みた。

(2)　2010 年度にはわれわれは、後期ハイデッガーにおける「非自由」ないし「無為」の考えを、彼の「放下」の思想から考察しようと試みた。そしてそのさい、シェリングやマリオンの思想との関連も、析出しようとした――われわれは、レヴィナス以降、特に近年かまびすしい「有とは別様に」の思索を、後期ハイデッガー、シェリング、マリオンにおいて指摘しつつ、この思想に対してはいささか批判的に対処しつつ、「無為」や「非自由」の問題を扱おうとしたのである。

(3)　2011 年度からは、われわれは「身体論」に移行する。まず 2011 年度にはわれわれは、マルブランシュ研究に専念した。デカルト以降の心身論のなかで、なぜわれわれが、特にマルブランシュの「機会原因論」を取り上げたかったのかといえば、それは平行論や予定調和のような解決策よりも、機会原因論の特異な解決策の方が、問題点の所在がくっきりと浮かび上がるであろうと考えたから、またのちに検討する予定のメーヌ・ド・ビランの身体論と比べ、その対比が強調しやすいであろうと考えたからであった。

(4)　そこで 2012 年度には、第一にメーヌ・ド・ビランのマルブランシュ批判が、第二にはビラン自身の身体論の主題化が、主たる研究対象となる。前者に関しては、デルボス、ブランシュヴィック、メルロ＝ポンティらの先行研究を踏まえながら、真の問題点の所在を摘出し、後者に関しては、ビランの身体論に関して、その発生論的解釈を貫徹することが、われわれの課題であった。
(5)　2013 年度には、前年度の発生論的身体解釈を引き継ぎ、メルロ＝ポンティとミシェル・アンリを主たる研究対象としつつ、まだ身体（もしくは肉）が世界と区別さえされていないような原初的な段階から、身体の発生や身体諸部分の分化を経て、「文化的」身体の発生にいたるまでを追ってゆくことが、われわれの目標となった。またマルブランシュ以前の、近世哲学における心身問題の真の出発点となったデカルトの心身論について、われわれの論攷（『自然の現象学』第五部）への序論的考察となりうるかぎりで、研究しようと試みた。

４．研究成果
(1)　2009 年度には、『愛知県立芸術大学紀要』No.39 で、論文①「根源としての＜有＞の忘却――ハイデッガーに関する幾つかの問い」と、②「実存と根底――人間的自由の非自由」を発表し、また日本ミシェル・アンリ哲学会の第１回記念大会で、③「受苦する神の自由／非自由――シェリングとミシェル・アンリ」という学会発表（招待）を行なった。
①　論文「根源としての＜有＞の忘却――ハイデッガーに関する幾つかの問い」は、ハイデッガーにおける「有の忘却」をめぐって、「忘却」の幾つかの意味を検討し直したものだが、さらには 2009 年度前半における半年間のフランス滞在中に読解しえた計 30 冊のフランス語によるハイデッガー文献の紹介とコメントも、そこに付け加えた。本稿は、フランスにおけるハイデッガー研究の最前線を押さえつつ、自らの検討も加えたものとして、我が国ではあまり類例のない貴重な論攷たりえたと思う。
②　論文「実存と根底――人間的自由の非自由」は、中期ハイデッガーの「自由」の問題を、特に彼の 1936 年や 1941 年のシェリング講義を中心に批判的に検討したもので、結果として中期ハイデッガーにおける自由／非自由の問題のみならず、それと同等以上の比重で、シェリング自身の 1809 年の論攷『人間的自由の本質について』における自由／非自由の問題を、批判的に考察するものともなった。このような観点から中期ハイデッガーや中期シェリングについて扱う論攷は、国際的に見ても稀であろうと思われる。
③　学会発表「受苦する神の自由／非自由――シェリングとミシェル・アンリ」は、上記②の問題意識を引き継ぎつつ、シェリングとアンリにおける「受苦する神の自由／非自由」を考察したもので、シェリングに関しては、その中期思想のみならず、後期思想をも含めて全体的に検討し、アンリに関しては、特に前期思想から後期思想にかけての変化を中心に、検討することとなった。これも、これまでの日本や世界の哲学界ではあまり注目されることのなかった観点からのシェリング論、アンリ論であるのみならず、筆者自身の哲学構想にも適った研究であって、その意義や重要性に関しては、十分に認められうるものと考えている。

(2)　2010 年度には、同志社大学で行なわれた関西哲学会第 63 回大会で、①「Être ou Autrement qu’être ?――シェリング、ハイデッガー、マリオン」という学会発表（招待）を、またベルギーのルーヴァン・カトリック大学で行なわれたアンリに関する或る国際学会で、②“Différance ou présent vivant ? La temporalité chez Husserl, Derrida, Lévinas et Henry”というフランス語での学会発表を行ない、さらには『愛知県立芸術大学紀要』No.40 に、③「『放下』の思想――ハイデッガーとシェリング」という論文を発表した。
①　学会発表「Être ou Autrement qu’être ?――シェリング、ハイデッガー、マリオン」は、将来の著作のために脱稿しておいた論攷「『有とは別様に』の思索と『放下』――シェリング、ハイデッガー、マリオン」を要約的に発表したもので、レヴィナス以降取り沙汰されることの多い「有とは別様に」の思索を、ハイデッガーやマリオンのみならず、はるかシェリングにまで遡って検討したところに、国際的な意義が認められると思う。
②　学会発表“Différance ou présent vivant ? La temporalité chez Husserl, Derrida, Lévinas et Henry”〔「差延か生ける現在か？フッサール、デリダ、レヴィナス、アンリにおける時間性」〕は、フッサールの「生ける現在」を若干変容しつつこれを受け継ぐアンリの時間論の観点から、デリダの「差延」やレヴィナスの「不意打ちする将来」の考えを批判したもので、きわめて活発な質疑応答を招いたことからも、国際的に見ても十分に刺激的なものであったと言えよう。
③　論文「『放下』の思想――ハイデッガーとシェリング」も、上述の未刊論文「『有とは別様に』の思索と『放下』――シェリング、ハイデッガー、マリオン」の一部を公刊したもので、後期ハイデッガーと中・後期シェリングについての独自な解釈として、国際的に見ても新しい観点を呈示しえたと思う。

(3)　2011 年度には、学会誌『ミシェル・アンリ研究』に、論文①「受苦する神の自由／非自由――シェリングとミシェル・アンリ」が、また学会誌『アルケー』に、論文②「Être ou Autrement qu’être ?――シェリング、

ハイデッガー、マリオン」が掲載され、また『愛知県立芸術大学紀要』No.41 に、③「マルブランシュの機会原因論」という論文を発表した。また京都大学で行なわれた宗教哲学会第 4 回学術大会で、④「他性と神――現代フランス現象学に於ける『超越』の問題をめぐって」という学会発表（招待）を行ない、さらには萌書房から、⑤『行為と無為――《自然の現象学》第三編』という著作（単著）を刊行した。

① 論文「受苦する神の自由／非自由――シェリングとミシェル・アンリ」は、(1)の③の学会発表を、若干縮めて原稿化したものである。

② 論文「Être ou Autrement qu'être ? ――シェリング、ハイデッガー、マリオン」は、(2)の①の学会発表を、若干縮めて原稿化したものである。

③ 論文「マルブランシュの機会原因論」は、「自然の現象学」の全体構想のなかの第五部第二章に相当する部分を、論攷「マルブランシュの心身合一論」（400 字換算で約 250 枚）として脱稿したうえで、その一部（400 字換算で約 50 枚）を公刊したもので、マルブランシュの身体論について詳細な検討を加えつつ、最終的には（ビランからの引用はほとんどなしに）ビランの観点からマルブランシュの身体論を批判しようとしたところに、我が国ではほとんど類例のない独自性を発揮しえたと思われる。

④ 学会発表「他性と神――現代フランス現象学に於ける『超越』の問題をめぐって」は、将来的には「自然の現象学」の第六部の内容となるような他者論を扱ったもので、ジャニコの主張するような「フランス現象学の神学的転回」が本当にあったか否かについての議論を出発点としつつ、マリオン、レヴィナス、アンリにおける「他者の他性」と「神の他性」との関係を探ったものだが、結果としてレヴィナスの倫理的他者関係の根底に、アンリ的な「場所」を置く「場所のアルケオロジー」を主張する結論を導き出した。現在日本の学界レヴェルから言って、その意義や重要性には、疑う余地がないものと信ずる。

⑤ 著書『行為と無為――《自然の現象学》第三編』は、全六部から成る「自然の現象学」という筆者のライフワークのうち、その第四部に相当し、サルトル、メルロ＝ポンティ、ハイデッガー、アンリ、ベルクソン、ブロンデル、カント、シェーラー、シェリング、マリオン等を扱いながら、「自由」「行為」の根底に「非自由」「無為」を見ようとしたものである。このような試み自体が、我が国では稀なものであり、また国際的にも、十分通用するような内容であると思われる。

(4) 2012 年度には、『愛知県立芸術大学紀要』No.42 に、①「メーヌ・ド・ビランのマルブランシュ批判」という論文を発表し、また『宗教哲学研究』No.30 に、②「他性と神――現代フランス現象学に於ける『超越』の問題をめぐって」という論文が掲載された。また京都大学で行なわれた或る国際学会で、③“Archéologie du corps propre. Vers une phénoménologie de l'Origine de la culture”というフランス語での学会発表（招待）を行なった。

① 論文「メーヌ・ド・ビランのマルブランシュ批判」は、デルボス、ブランシュヴィック、メルロ＝ポンティらの先駆的な諸解釈を踏まえながら、ビラン自身のマルブランシュ批判を検討しつつ、心身論の真の問題点の在処を探ったもので、我が国ではあまりこのような研究は、これまでなされてこなかったように思われる。なお、さらに 2012 年度中に、ビラン自身の身体発生論についての長大な論文を脱稿しておいたのだが、未刊であり、将来の著作中の一章たるべく待機中である。

② 論文「他性と神――現代フランス現象学に於ける『超越』の問題をめぐって」は、(3)の④の学会発表を、若干縮めて原稿化したものである。

③ 学会発表“Archéologie du corps propre. Vers une phénoménologie de l'Origine de la culture”〔「身体のアルケオロジー。文化の＜根源＞の現象学に向けて」〕は、主としてアンリの著作『身体の哲学と現象学』と『受肉』における「主観的身体」や「肉」について、アンリ自身が引用しているマルブランシュ、ヒューム、コンディヤック、ビラン、ラニョ、フッサール、ベルクソン、メルロ＝ポンティらの諸テクストをも検討しつつ、考察し直したもので、現在日本の学界レヴェルから言っても、国際的にも、その意義や重要性は十分に認められるものと思う。

(5) 2013 年度には、『フランス哲学・思想研究』No.18 に、①“Archéologie du corps propre. Vers une phénoménologie de l'Origine de la culture”という論文が掲載され、また『愛知県立芸術大学紀要』No.43 に、②「デカルトと心身合一の問題」という論文を発表した。さらにはベルギーでは、フランス語の共著③ *La vie et les vivants. (Re-)lire Michel Henry* が公刊された。

① 論文“Archéologie du corps propre. Vers une phénoménologie de l'Origine de la culture”は、(4)の③の学会発表を、そのまま原稿化したものである。なお 2013 年度中には、この原稿を約 2, 5 倍の分量に拡大して詳述した原稿を脱稿したのだが、未刊であり、将来の著作での公刊待ちである。

② 論文「デカルトと心身合一の問題」は、当初のもくろみでは、ただ近世心身問題の出発点たるデカルトの心身論の基本を押さえておこうとするものだったのだが、結果としてデカルトにおける「主観的身体」という、従来にはあまり見られないテーマをも扱うこととなった。本稿はもともと、グレスやマリオンらの最新のデカルト文献を駆使しつ

つ、デカルトにおける心身合一の問題を検討し直した同名の論文（未刊）の一部のみを公刊したものだったのだが、未刊の方の論文では、デカルトにおける「発生論的観点」の不足など、デカルトに対する若干の批判も含まれていて、独自性がいっそうはっきり見て取られよう。この未刊論文も、将来の著作に掲載する予定である。
③　共著 *La vie et les vivants. (Re-)lire Michel Henry* では、(2)の②で示されたフランス語での学会発表“Différance ou présent vivant ? La temporalité chez Husserl, Derrida, Lévinas et Henry”が、そのままの形で掲載されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１０件）
①中　敬夫、「デカルトと心身合一の問題」、『愛知県立芸術大学紀要』、査読無、No.43、2014、pp.77-90
②中　敬夫、“Archéologie du corps propre. Vers une phénoménologie de l’Origine de la culture”、『フランス哲学・思想研究』、査読無、No. 18、2013、pp.41-60
③中　敬夫、「他性と神――現代フランス現象学に於ける『超越』の問題をめぐって」、『宗教哲学研究』、査読無、No. 30、2013、pp.1-18
④中　敬夫、「メーヌ・ド・ビランのマルブランシュ批判」、『愛知県立芸術大学紀要』、査読無、No.42、2013、pp.3-16
⑤中　敬夫、「マルブランシュの機会原因論」、『愛知県立芸術大学紀要』、査読無、No.41、2012、pp.61-73
⑥中　敬夫、「Être ou Autrement qu’être？――シェリング、ハイデッガー、マリオン」、『アルケー』、査読無、No.19 、2011、pp.47-59
⑦中　敬夫、「受苦する神の自由／非自由――シェリングとミシェル・アンリ」、『ミシェル・アンリ研究』、査読無、No.1、2011、pp.1-24
⑧中　敬夫、「『放下』の思想――ハイデッガーとシェリング」、『愛知県立芸術大学紀要』、査読無、No.40、2011、pp.71-84
⑨中　敬夫、「実存と根底――人間的自由の非自由」、『愛知県立芸術大学紀要』、査読無、No.39 、2010、pp.105-118
⑩中　敬夫、「根源としての＜有＞の忘却――ハイデッガーに関する幾つかの問い」、『愛知県立芸術大学紀要』、査読無、No.39、2010、pp.91-104

〔学会発表〕（計５件）
①中　敬夫、“Archéologie du corps propre. Vers une phénoménologie de l’Origine de la culture”, Colloque intermédiaire de l’ASPLF (Association des Sociétés philosophiques de langue française). Symposium : 《 Michel Henry et la phénoménologie de la culture 》, 2013年3月30日、京都大学
②中　敬夫、「他性と神――現代フランス現象学に於ける『超越』の問題をめぐって」、宗教哲学会第4回学術大会、2012年3月24日、京都大学
③Yukio NAKA、“Différance ou présent vivant ? La temporalité chez Husserl, Derrida, Lévinas et Henry”、Congrès international *Re-Lire Michel Henry. La vie et les vivants*、le 16 décembre 2010、l’Université catholique de Louvain
④中　敬夫、「Être ou Autrement qu’être？――シェリング、ハイデッガー、マリオン」、関西哲学会第63回大会、2010年10月16日、同志社大学
⑤中　敬夫、「受苦する神の自由／非自由――シェリングとミシェル・アンリ」、日本ミシェル・アンリ哲学会第1回大会、2010年3月26日、同志社大学

〔図書〕（計２件）
①Grégorie Jean, Jean Leclercq, Nicolas Monseu, Yukio NAKA, etc., Presses universitaires de Louvain, *La vie et les vivants. (Re-)lire Michel Henry*, 2013, 657 (157-166)
②中　敬夫、萌書房、『行為と無為――《自然の現象学》第三編』、2011、426

６．研究組織
(1)研究代表者
中　敬夫（NAKA, Yukio）
愛知県立芸術大学・美術学部・教授
研究者番号：80254267